

病センハン 原因菌 免疫逃れる仕組み

阪大など解明 新薬開発に可能性

ハンセン病の原因となるらい菌が免疫から逃れる仕組みの一部を人の細胞を使った実験で明らかにしたと、大阪大などの研究チームが発表した。新薬の開発につながる可能性があるという。論文が国際学術誌に掲載された。

ハンセン病は完治につながる治療薬があるが、治療薬に耐性を持つらい菌もいる。世保健機関(WHO)によると、世界の新規感染者は年間約14万人に上り、日本では2013〜22年で日本人5人、から排除されずに発症まで5年ほど潜伏する。ただ、その詳しい仕組みはわかっていなかった。

山崎晶・大阪大教授(分子免疫学)らは、人の細胞などを使った実験で、らい菌が、免疫を活性化させる物質を素早く別の物質に変換することで免疫細胞をかく乱し、攻撃を受けにくくしていることを解明した。

山崎教授は「変換の仕組みを阻害する薬を開発できれば潜伏を防げるので、人の免疫によってらい菌を排除できる可能性が高まる」と話している。

鈴木定彦・北海道大越中教授(細菌学)の話「ハンセン病は差別や偏見につながる病気のため、実際の患者数は報告よりも多い可能性がある。現在の治療薬に耐性のある菌を排除することがハンセン病の撲滅につながる。その上で重要な研究成果と言える」

山崎晶・大阪大教授(分子免疫学)らは、人の細胞などを使った実験で、らい菌が、免疫を活性化させる物質を素早く別の物質に変換することで免疫細胞をかく乱し、攻撃を受けにくくしていることを解明した。

山崎教授は「変換の仕組みを阻害する薬を開発できれば潜伏を防げるので、人の免疫によってらい菌を排除できる可能性が高まる」と話している。

山崎晶・大阪大教授(分子免疫学)らは、人の細胞などを使った実験で、らい菌が、免疫を活性化させる物質を素早く別の物質に変換することで免疫細胞をかく乱し、攻撃を受けにくくしていることを解明した。

山崎教授は「変換の仕組みを阻害する薬を開発できれば潜伏を防げるので、人の免疫によってらい菌を排除できる可能性が高まる」と話している。

鈴木定彦・北海道大越中教授(細菌学)の話「ハンセン病は差別や偏見につながる病気のため、実際の患者数は報告よりも多い可能性がある。現在の治療薬に耐性のある菌を排除することがハンセン病の撲滅につながる。その上で重要な研究成果と言える」

山崎晶・大阪大教授(分子免疫学)らは、人の細胞などを使った実験で、らい菌が、免疫を活性化させる物質を素早く別の物質に変換することで免疫細胞をかく乱し、攻撃を受けにくくしていることを解明した。

山崎教授は「変換の仕組みを阻害する薬を開発できれば潜伏を防げるので、人の免疫によってらい菌を排除できる可能性が高まる」と話している。

山崎晶・大阪大教授(分子免疫学)らは、人の細胞などを使った実験で、らい菌が、免疫を活性化させる物質を素早く別の物質に変換することで免疫細胞をかく乱し、攻撃を受けにくくしていることを解明した。

山崎晶・大阪大教授(分子免疫学)らは、人の細胞などを使った実験で、らい菌が、免疫を活性化させる物質を素早く別の物質に変換することで免疫細胞をかく乱し、攻撃を受けにくくしていることを解明した。

山崎教授は「変換の仕組みを阻害する薬を開発できれば潜伏を防げるので、人の免疫によってらい菌を排除できる可能性が高まる」と話している。

鈴木定彦・北海道大越中教授(細菌学)の話「ハンセン病は差別や偏見につながる病気のため、実際の患者数は報告よりも多い可能性がある。現在の治療薬に耐性のある菌を排除することがハンセン病の撲滅につながる。その上で重要な研究成果と言える」

山崎晶・大阪大教授(分子免疫学)らは、人の細胞などを使った実験で、らい菌が、免疫を活性化させる物質を素早く別の物質に変換することで免疫細胞をかく乱し、攻撃を受けにくくしていることを解明した。

山崎教授は「変換の仕組みを阻害する薬を開発できれば潜伏を防げるので、人の免疫によってらい菌を排除できる可能性が高まる」と話している。

山崎晶・大阪大教授(分子免疫学)らは、人の細胞などを使った実験で、らい菌が、免疫を活性化させる物質を素早く別の物質に変換することで免疫細胞をかく乱し、攻撃を受けにくくしていることを解明した。